

不忍文庫本『日本靈異記』に関する基礎的考察

藪 敏 晴

はじめに

二年ほど前のことになる。本学國文學會平成三年度秋季大会（平成三年十一月一六・一七日）における、本学図書館貴重本特別展示（同一五〜一八日）に、『靈異記』という外題を有する中・下巻二冊の写本が展示された。

中巻末の跋文等の調査によって、この二冊の写本は、『日本国現報善悪靈異記』（以下、原則として『靈異記』と略記する）研究史上極めて重要な位置を占めながら、四十年来所在不明とされてきた、不忍文庫本『日本靈異記』と通称される貴重な一本であることが確認された。

該本の調査はいまだ全きに至っていないが、本稿では、書誌を記したのち、『靈異記』研究史上での該本での位置を確認し、ついで、その祖本である真福寺本との異同を述べ、最後に、引用書目に関する書き入れをめぐる若干の点にふれたいと考える。

一 書 誌^①

写本。中・下二冊。四ツ目袋綴。表紙は、茶色、縦凡二十八・一糎、横凡二十・〇糎。両巻とも、白紙題簽（縦凡十四・四糎、横凡三・九糎）に「靈異記」と墨書して表紙左肩上部に貼付。

本文は、一面七行、一行が大體二十字から二十四字くらい。各巻筆跡を異にする。中巻は下巻に比して線が細く、下巻はやや肉太。ただし、このことは、必ずしも別人による書写を意味しない。詳細は後述する。各巻とも、祖本の冒頭部の破損から細かな虫喰に至るまで、克明に写している。句読、校異のほか、説話引用書目、中巻の訓釈など、朱・墨による書き入れ多数。これらは両巻同筆で、いずれの本文とも別筆。詳細な中巻に比して、下巻のそれは極めて簡略である（下巻の訓釈は書き入れでなく、本文同筆）。

中巻は墨付五十六丁で、遊紙はない。四十二話を所収し、巻頭に序文・目録を有する。計七七六行。序文は、祖本の破損により前半を欠く。各話冒頭に、本文と同じ高さで題目を記す。また、各話末の余白に、本文と別筆で、訓釈が朱で書き入れてある（次話冒頭の余白におよぶ場合もある）。内題・尾題なし。下巻は墨付六十丁で、遊紙はない。三十九話を所収し、巻頭に序文・目録を有する。計八二五行（尾題以下は含まない）。中巻同様序文前半欠。題目は、各話冒頭に、第一、二話は本文と同じ高さで、第三話以降は、本文から一、二字下げて記してある。訓釈は、中巻と異なり、書き入れではなく、本文と同筆で各話末に記す。内題はなく、巻末に、

大日本国現報善惡靈異記卷下 諾樂右京葉師寺傳燈住位僧
景戒録但三卷注之

と尾題があり、後に、本文・書き入れと別筆で「一交了」とある。

中巻末に以下のごとき跋文がみえる。

右靈異記中巻 上巻
闕 以尾張國大須真福寺藏本 其國人筆
寫所傳 書寫 以水府本 原本金剛峯
金剛三昧院藏云 校正焉 所謂水府本借諸親友椽亭望之 其
参考諸書及考「證數事者皆望之手校也 而傳真福寺本者石原正明也 微二子何得是古書」何得校之 我喜可知 云 以納不忍

文庫 享和三年八月三日 源弘賢

享和三年は一八〇三年。椋亭望之とは狩谷椋齋^②（安永四（一七七五）→天保六（一八三五））のこと。椋齋は号で、望之が本名。言うまでもなく、本格的『靈異記』研究に先鞭をつけた人物であり、その業績は、いまだ価値を失っていない。石原正明^③（明和元（一七六四）頃→文政四（一八二二））は、尾張の出身で、もとは漢学をむねとしていたが、議論にやぶれて宣長門にくだり、のち、江戸に出て塙保己一^④（延享三（一七四六）→文政五（一八二三））につき、保己一に第一の学頭として遇されたという。源姓を称した屋代弘賢^⑤（宝暦八（一七五八）→天保一二（一八四二））は、近世を代表する類書『古今要覧稿』の編者であり、塙保己一を助けて『群書類従』の編纂校訂にも従事した。該博な学識を有する学者、持明院流の能書家であるとともに、また、近世屈指の蔵書家であり、その文庫が不忍文庫である。本学蔵の屋代本『平家物語』は語り系諸本最古のものとされるが、これも不忍文庫旧蔵本であり、「屋代本」の呼称もここに由来する。

椋齋の『校本日本靈異記』は、文化十三年（一八一六）、群書類従本として刊行された。その跋文に次のごとくある。

又尾張國大須真福寺藏古鈔中下二卷 塙先生獲其摹本 屋代先生復影鈔以寄之

前掲の該本中巻跋文とあわせれば、現存する『靈異記』中・下巻の最善本とされる真福寺本の模本を、弘賢が影鈔^⑥して椋齋に貸したというこの一本こそ、まさに該本であると知られる。その模本を手にしたのは塙保己一だったのであり、石原正明、屋代弘賢ともに保己一門であったことを思えば、模本の招来は、安永八年（一七七九）に保己一がその刊行を天満宮に誓ったといわれる群書類従に、『靈異記』を収める日を期してのことであったのかもしれない。この模本の所在は不明である。

さて、該本は親本を透き写し（影鈔）したものなのだから、前述した本文各巻の別筆は、該本の筆の違ひではなく、親本の書写者が真福寺本を模写する際の筆跡の違ひだとわかる。さらに、現在、口絵等で容易に見ることの可能な真福寺本の写真^⑦と比較すると、その筆は該本と極めて近いから、破損虫喰部分のみならず、筆跡まで真似た模写であったと知られる。

かくして、模本・影鈔本（該本）ともに、筆の異なる各巻の書写者が別人であったか否かは定かでない（両跋文によれば、影鈔者は弘賢自身か）が、親本模写の際の各巻における態度の違いを小泉道氏が指摘されている^⑧。すなわち、真福寺本に、衍字――

中巻二例・下巻一例、本文の誤字を傍書して訂正——中巻七例・下巻七例、いずれも見せ消ちになっているものを、該本中巻では、衍字を削除し、改めた文字のみを記すのに対して、下巻では祖本同様見せ消ちのままになっている。該本中巻には、他にも、重複した題目が見せ消ちになっている部分を削除し、補入すべき文字が傍書されているのを本文に補入した例があつて、忠実に親本を書写する下巻に比して、中巻は、親本の書き入れを、本文に組み入れて整理している。該本が影鈔本であることからすれば、かかる中巻の書写態度は模本書写者のものであろう。

書き入れの筆跡については、弘賢自身のものである旨、小泉氏が武田祐吉氏に教示を得たという⁹⁾。

さて、該本には、各巻頭（一才右）に、上から「青谿書屋」「寶玲文庫」「木正辞章」「不忍文庫」（中巻のみ一才左下）の四類の蔵書印が捺されている（現在は「青谿書屋」の下に本学図書館蔵書印がある）。無論、その最後が当本の通称の由来であるが、ここで、所蔵者について一瞥しておく。

「木正辞章」は木村正辞（文政一〇〔一八二七〕〜大正二〔一九一三〕）の蔵書印。正辞は『万葉集』研究でその名を知られる。岡本保孝（寛政九〔一七九七〕〜明治一一〔一八七八〕）に漢学を学ぶ。保孝は、漢学に椋斎の、国学に清水濱臣の学統を継ぐ。弘賢の不忍文庫は、弘賢没後、蜂須賀家の阿波国文庫に献納されたが、散逸して世に出たものもあるという。該本については、散逸したものを取得したと考えるよりは、弘賢から椋斎、保孝の手を経て正辞に渡ったとみるのが穏当であろうか。ちなみに、次項に挙げる小泉道氏諸論稿には、椋斎・弘賢自筆の、あるいは自筆の書き入れを有する『靈異記』諸伝本のいくつかに、正辞の蔵書印が捺されていることが記されている。

「青谿書屋」は大島雅太郎氏（明治一〇〔一八七七〕頃〜昭和二五〔一九五〇〕頃）の蔵書印。大島氏は戦前の三井合名本社¹⁰⁾の常務理事を務めた人で、佐佐木信綱竹柏園門下の歌人。池田亀鑑氏と極めて近く、その推薦で高価な良質の古写本を収集し、それを池田氏が研究に使用して、解説や調査報告を大島氏に書いておられたという。昭和七年頃、川瀬一馬氏が入手されたという「青谿書屋展観目録」と題する印刷目録¹¹⁾の追加の項に、

三 靈異記 大須本摸寫〔屋代弘賢〕

とあるが、まさに該本であると知られる。昭和一五年頃三井を定年退職、悠々自適の生活を送る間に敗戦に遭遇する。さらに昭和二一年の新旧田交換などで、戦前のおもな古書の買い手はほとんどが売る側に転じたというが、大島氏も、また、古書の価値が最低の時期に蔵書の大部分を処分しておられたという。氏の窮状をみかねた池田氏の依頼を受けた反町茂雄氏が、昭和二二年一月に大島氏のもとを訪れ、残部四、五十部の評価をされた際の目録の抄出¹⁴には、当不忍文庫本は見当たらない。同年に、青谿書屋本の大部分を購入したという村口書房に入ったものか。その数年後に遠逝されたというが、川瀬、反町両氏ともに、大島氏青谿書屋本の散逸を惜しんでおられる。生没年はこれらのことからの推定である。

「寶玲文庫」は英国人フランク・ホーレー (Frank Hawley) 氏¹⁵ (一九〇六—一九六一) の蔵書印。和本の蒐集家として、外国人では無論のこと、日本人を含めても天理の中山正善氏と並ぶ戦後最高最大のコレクターであったと反町茂雄氏が評される蔵書家。昭和三六年一月に逝去されたのち、同年四月に東京美術倶楽部でホーレー文庫入札会が開かれたが、その目録「ホーレー文庫蔵書展観入札目録」の摘記¹⁶に、

日本靈異記 屋代弘賢手写 古写本臨模二(冊) 三〇、六〇〇円

とあるのが該本であろう。本学図書館貴重書の受入台帳によれば、該本は、同年九月三〇日に村口書店^(マ)より買入れとなつてゐる。価格は記されていない。この入札会では売れ残つたらしいが、それを、弘文荘の反町氏とともに入札売立の催しの労をとつた、村口書房の村口四郎氏が引き取っていたものか。ホーレー氏の蒐書に主として力を致したのは村口氏であったよし、大島氏からホーレー氏、そして本学と、当不忍文庫本『日本靈異記』の移動には、常に村口氏の尽力があったとおぼしく、該本が散逸するを免れたのも、氏の力によるところが大きいと推察される。

該本が本学蔵となるについては相応の理由があった。後述するが、元本学教授の佐藤謙三、武田祐吉両氏が、大島氏蔵の該本を使用して、画期的な『靈異記』の校本および注釈を、続けて世に出しておられたのである。武田氏は昭和三三年に逝去しておられるから、本学図書館の当不忍文庫本入手にあたっては、佐藤氏の示唆があったやにも思われるが、もはやそれを知るすべもなさそうで、推測の域を出るものではない。

二 研究史上にみえる不忍文庫本『日本靈異記』

(一) 研究史粗描

当不忍文庫本に言及するおもな諸書は以下のごとくである。(敬称略)

- ①狩谷椽齋『校本日本靈異記』(文化十三年(一八一六)群書類従本として刊行。本稿では、『日本古典全集第一回 狩谷椽齋全集第一』(大一一四、一一)によった。なお、『校本日本靈異記』という通用の書名は、依拠本には見当たらず、国書総目録もこれを立てない。覆刻本である依拠本は巻初中央に「靈異記」と記す。以下、椽齋校本と略記する。)
- ②狩谷椽齋『日本靈異記攷證』(江戸の書肆萬笈堂から文政四年(一八二二)に刊行。本稿では①の依拠本の続刊『椽齋全集第二』(大一一五、一)によった。以下、攷證。)
- ③國學院大學修鍊報國團學術部(代表武田祐吉)編、佐藤謙三解説『校本日本靈異記』(明世堂書店)昭一八、七。以下、佐藤校本。)
- ④武田祐吉校註『日本古典全書 日本靈異記』(朝日新聞社)昭二五、九。以下、全書本。)
- ⑤小泉道「靈異記の高野本をめぐって——高野本原本想定を試み——」(『国語国文』二五—八。昭三一、八。以下、小泉論文①。)
- ⑥小泉道「靈異記の眞福寺本と椽齋校本」(『国語国文』二六—四。昭三一、四。以下、小泉論文②。)
- ⑦小泉道「大東急記念文庫所蔵群書類従本日本靈異記の書入れについて」(『かがみ』三三。昭三五、一。以下、小泉論文③。)
- ⑧小泉道「椽齋の靈異記攷證補訂——大東急記念文庫所蔵本攷證の書入による——」(『国語国文』二九—五。昭三五、五。以下、小泉論文④。)
- ⑨小泉道「大東急記念文庫所蔵日本靈異記について」(『かがみ』五号。昭三六、五。以下、小泉論文⑤。)

㉞ 中西進「日本國現報善惡靈異記」(『群書解題』第十九卷。昭三六、四。)

㉟ 小泉道注校『真福寺本日本靈異記』(訓点語学会編『訓点語と訓点資料』別刊第二、第二十二輯。昭三七、六。以下、小泉論文⑥。)

㊱ 遠藤嘉基・春日和男校注「『日本古典文学大系70 日本靈異記』解説「諸本(小泉道執筆)」(『岩波書店』昭四二、三。以下、大系本。)

㊲ 小泉道「掖齋ていせうの『日本靈異記』校訂と考証——その二十余年を跡付けて——」(『国語国文』四三—一。昭四九、一。以下、小泉論文⑦。)

㊳ 中田祝夫校注『日本古典文学全集6 日本靈異記』解説(『小学館』昭五〇、一一。以下、全集本。)

㊴ 小泉道校注『新潮日本古典集成(第六七回) 日本靈異記』解説(『新潮社』昭五九、一二。以下、集成本。)

㊵ 小泉道『日本靈異記諸本の研究』(『清文堂』平元、六。以下、小泉論文⑧。)

『靈異記』の伝本には、五種の古写本があるが、うち四種は、比較的近年、世に知られるところとなったものである。ために、その本文校定も、それぞれの時代に披見可能なわずかな伝本の範囲内に限定されたのであり、新出の一本によって、本文がかなり大幅に改訂されてきたのである。たとえば、従来、中・下巻序文を完全に備えた伝本はなかったが、前田家本の出現によって下巻、来迎院本の出現によって中巻の序文が補われた。さらに、来迎院本が中・下巻序文をほぼ完備するにより、『東大寺要録』所載の『靈異記』逸文を中巻序文の一部とする永井義憲氏の推定が実証され、また、下巻序文の冒頭は前田家本にしか存せず、しかもそれが訓釈と対応せぬことなどからその偽書説が行なわれたが、それも払底せられたなどは、その好例といえる。『靈異記』本文校勘史は、新本の出現に重なる部分が極めて大きい。

そこで、研究史を一瞥するにあたって、五古写本を、世に出た順に簡単に紹介しておく。¹⁸

高野本(金剛三昧院本)・建保二年(一二二四)書写の奥書を有し、上・中・下三巻を完備する唯一の古写本であるが、

各巻に欠文・省略等が多い。金剛三昧院に存したとされる祖本は所在不明。近世に書写せられた伝本はほとんどがこの系統にあたる。流布本。以下に記す二系統に大別される。

①模本系…②の彰考館の史官の手が入っているもの以外を指す。国会図書館本の複製が刊行されている。(『古典資料六』へすみや書房)昭四四、一一)

②延宝本系…基本的には延宝八年(一六八〇)書写の奥書を有している。水戸彰考館の史官の手が入っており、その私意の改訂が多いとされる。流布したのは多くがこの系統。

真福寺本…奥書をもたないが、平安末期から鎌倉前期頃にかけての書写とされる、中・下二巻の卷子本。椋斎校本の中・下巻底本として世に知られた。現存する伝本中、中・下巻の最善本とされる。複製本はなく、小泉論文⑥(原本模写の謄写版)が行われている。

前田家本…明治一六年に木村正辞によって発見紹介された、嘉禎二年(一二三六)書写の奥書を有する下巻のみの冊子本。来迎院本の出現までは下巻序文冒頭部を有する唯一の伝本であった。前田育徳財団尊経閣文庫所蔵。同財団によって複製が刊行されている。(『尊経閣叢書一九』昭六、一一)

興福寺本…延喜四年(九〇四)書写の奥書を有する上巻のみの卷子本。他の伝本をはるかにしのぐ最古の写本。大正一年九月に、興福寺東金堂の塵埃の中から発見されたという。複製の『興福寺本日本霊異記』(『京都便利堂』昭九、三)がある。

来迎院本…奥書の存否は欠失のため不明だが、十二世紀初頭ごろの書写とみられる中・下二冊の冊子本。昭和四八年発見。興福寺本に次ぐ古写本で、両巻の序文がほぼ完全に存している唯一の伝本。複製の『来迎院本日本霊異記』(『ほるぷ出版』昭五二、四)がある。

(二) 本文——椋斎校本と武田氏全書本

狩谷椋齋は、椋齋校本の跋文において、書誌の項で引用した部分の直後に、以下のごとく記している。

校之（不忍文庫本を指す…筆者注）高野本所缺巋然俱存 余驚喜乃新訂一本 其上卷依高野本為原 中下二卷依尾張本為原（ここにみえる「高野本」については、この箇所の前に「屋代輪池先生摹高野山所藏原本被惠借」とある…同上）

椋齋校本の刊行まで最も流布していた『靈異記』テキストは、「水戸光圀の命を受けた彰考館の史官が、延宝八年（一六八〇）の閏八月に高野山に行つて祖本を書写し、同館に持ち帰つて校訂したいわゆる延宝本（小泉論文⑧八七頁）」であった。その校訂は「厳密な校勘を経ない当代的感覚による私意の改訂が主であつたとみられる（同八五頁）」ものであり、「爾後この延宝本が広く流布するに至り、契沖をはじめ、宣長・椋齋たち（人名一部略）が、これの書写や校訂に苦慮することになった（同 一四六頁）」。

わずかに、「契沖が今井似閑本に松下見林本を対校して書入れた校合本（同 一六一頁）」が、「流布状態は、延宝八年の識語を持つ彰考館本に次ぐものではあるが（同 一六二頁）」、「あるいは転写されたり、あるいは書入れられたりして、テキストとして重んじられていた（同前）」。

「契沖の校合した二写本の所属する系統は、同じ金剛三昧院本系統でも、見林本は模本系統であり、似閑本は延宝本系統であつた。だから、多少見出される両本間の異同を通じて、本文校訂上に資となるものを少々は提供したはずである（同 一五三頁）」とはいへ、「各巻に欠逸・省略条があつて説話実数条はほぼ三分の二。上巻と中・下巻との別伝来も推測され、本文に誤字・脱字なども目立ち、検討してみると三度以上は転写されているようだ（同 二二頁）」とされる高野本の転写本であるにかわりはない。

かような状況において、上巻に高野本祖本の模本、中・下巻に、今日においてもその最善本とされる真福寺本の模本を底本とした椋齋校本の新訂は、『靈異記』研究史上において、まさに画期と称せられるべきことであつた。攷證は、その椋齋校本の校訂根拠・用字・用語・訓などの考証をまとめたものである。両書は、「諸本を調査してみると、十八世紀から十九世紀初頭にかけて次々と書写されていた延宝本が、類従本刊行後は俄然その数を減じ、校合や考証も殆ど見当たらなくなっているが、これは諸家が椋齋の二著に依拠するを専らとしたためとみられる。幕末頃に輩出した訓釈索引も、辞書類への収録も、古代諸文献の注釈への援用においても、その例に漏れない。（同 二二五頁）」とされる、『靈異記』研究史上不朽の名著である。後述すること

く、武田祐吉氏の全書本刊行まで、世に出た『靈異記』テキストのすべてが椽齋校本を底本とすることが、まさしくそれを保証する。

椽齋は、弘賢所蔵の当不忍文庫本が、彼のもとにもたらされたことに驚喜してこの事業に着手したのであり、該本なしには椽齋校本は成らなかつた。このことだけからも、該本が『靈異記』研究史上にはたした役割には、極めて大きいものがあつたといえる。

その後、木村正辞の手を経て、大島雅太郎氏の所蔵となり、該本は、再び研究史上に登場する。佐藤校本の佐藤謙三氏の解説には、

其の（椽齋の…筆者注）校本が群書類従に収められて一般に行はれた。今此の本も其を本文として用ゐ、（中略）又所謂眞福寺本の轉寫本である不忍文庫本を参照して必要な考異は此を注した。（四頁）

とある。「不忍文庫本」の通称は、この佐藤校本にはじまる。

次いで、全書本凡例には、

原文は、上巻は興福寺本、中巻・下巻は眞福寺本を底本とし、（中略）なお、眞福寺本は不忍文庫本を使用し、（五九頁）とあつて、武田祐吉氏が、椽齋校本以来久びさに、不忍文庫本を中・下巻の底本とされた。小泉道氏は小泉論文②・⑥において、

さらに（不忍文庫本の…筆者注）原本の検討もあつたならばと惜しまれる。（②三〇頁下段注）

（異体字の処理、あるいは誤写の改訂などの…筆者注）無注記の改訂が少なからずあるから、全書によって不忍文庫本本文の姿を厳密に察知することは出来ない。（⑥一二五頁下段）

（全書本…筆者注）校訂の過程における（不忍文庫本…同上）書入れの処理の点に難点が残る。（⑥一二六頁下段）と批判しつつも

上巻を興福寺本⁽⁴⁴⁾・中下巻を不忍文庫本により、従来の類従本の域を脱した画期的なものである。(6) 二二頁下段)と評価しておられるが、これが、この全書本文の価値を端的に示している。

椽齋校本以降のテキストでは、明治二七年に経済雑誌社から翻刻せられた群書類従本が、いちはやく校合本として前田家本を採用し、椽齋校本を大正一四年に覆刻した日本古典全集本が、その解題に、前田家本の下巻序文逸文を掲載した他、板橋倫行校譯『日本靈異記』(春陽堂) 昭四、五)、高瀬承巖訳『日本国現報善惡靈異記』(國譯一切經和漢撰述部) 史傳部二十四(大東出版社) 昭一三、一二) 古田紹欽校訂『日本靈異記』(『古典研究』第四卷第二號別冊附録、「雄山閣文庫」第一部34、(雄山閣) 昭一四、二)、佐藤校本(昭一八、七)、松浦貞俊著『續日本古典讀本2 日本靈異記』(『日本評論社』昭一九、八) 等が、たてつづけに刊行せられ、いずれも前田家本を、また、高瀬承巖氏以降は新出の興福寺本、佐藤謙三氏はそのほかに不忍文庫本を、校合本として使用するなど、新たな校訂作業が施されてはいるものの、いずれも椽齋校本を底本とし、その枠を越えることがなかったに對して、全書本は、上巻にも、新出した最古の写本である興福寺本を底本として採用しており、従来の『靈異記』本文の面目をほぼ一新する、『靈異記』研究史上、椽齋につづく第二の画期的業績であった。

その後、前述した、原本未調査・改訂無注記という小泉氏の全書本批判は大系本がこれを補い、全集本は、新出した来迎院本の中巻序文を採用し、集成本は、その来迎院本を中・下巻の校合本としているし、また、松浦貞俊著『日本国現報善惡靈異記註釋』(『大東文化大学東洋研究所叢書』9。(大東文化大学東洋研究所) 昭四八、六) は、極めて詳細な注を施すなど、新たな注釈書刊行のたびに、『靈異記』の本文研究は格段の進歩をとげている。が、昭和四三年に急逝された松浦氏の遺稿集という事情を有する松浦本を例外として、上巻興福寺本、中・下巻真福寺本という底本は、全書本以降ゆらがない。

よほどの善本の新出をみない限り動くことはないと思われる、『靈異記』底本のこの枠組みを決定した武田氏の全書本も、椽齋校本と同様、大島氏蔵の当不忍文庫本なくしては、成らなかつたのである。

(三) 書き入れ——高野本祖本をめぐって

当不忍文庫本の書き入れを有効に活用してあげられた大きな業績に、小泉論文①がある。その他に攷證を挙げうるが、該本跋文に弘賢自身記したごとく、「参考諸書及攷證數事者皆望之手校」であるから、その資料のほとんどは攷證筆者があらかじめ用意していたものであつて、該本の価値とはいえない。¹⁹⁾

小泉氏は、『靈異記』伝本の中で最も広く流布しながら、その祖本の所在が不明な高野本の原姿^(マ)を想定すべく、「高野本日本靈異記考」(『国語国文』二二―一一。昭二七、一一)をものしたのち、さらに、それを受けた論考を世に出された。小泉論文①がそれである。

従来、まったくといってよいほど研究の進捗をみていなかった高野本諸本の系統および祖本の姿が、この二本の論稿により世に知られたわけで、その価値は極めて高いといわねばならない。(のちに、はじめの論稿は『日本文学研究資料叢書 説話文學』〔高橋貢氏・中野猛氏解説へ有精堂〕昭四七、一一)に収載された。)高野本諸写本に直接あたつた論考は詳細を極め、ここではそのほんの一端を紹介するのみであるが、そこで引かれた数多の資料の中で、おそらく最も重要なもののひとつが当不忍文庫本の書き入れであつた。

氏は、高野本諸本のうち、祖本の模本系統の伝本を第一類、延宝本に代表される改変本を第二類と呼び、奥書・椋斎校本・攷證および延宝本系統諸本の親本的位置にある彰考館現蔵本によって分類の基準を設定し、上野図書館本(現国会図書館本)・京都府立図書館本・三手文庫蔵契沖校本に書き入れのイ本(その跋文によって松下見林蔵本と知られる。現存しない。)の三本をその第一類と認定された。検討せらるべきは当然この第一類である。これらの本文を比較するにあたって、小泉氏は、高野本祖本の模本(以下、高模本)を上巻の底本とした椋斎校本および攷證を参照された。しかし、椋斎校本の中・下巻は、真福寺本を祖本とする当不忍文庫本によつてゐるため、攷證にも高模本との異同注記は多くない。そこで、中・下巻に関する補足資料として、該本の、高模本を引いたとみられる書き入れが採用されたのである。

該本の書き入れの中には、「水(府本)」「高(野本)」と校合本を明記したものがあつるが、佐藤校本解説では、この両者を同一視している(一〇頁)。該本跋文に高模本の記事は見えないし、また、当時、高野本の転写本は盡く延宝本(該本のいう水府

本)か椋齋校本によるという池田龜鑑氏説が行なわれていた(同五〇七頁)ことを思えば、これはもつともな判断であった。小泉氏は、この見解に、朱筆の「水」を見せ消ちにして、墨筆で「高」と訂正した例が六例あること、また、中巻朱筆の訓釈(同じく書き入れ)に朱・墨で校異を記した例(校合本不明記)が数多あることの二点から疑義を呈された。「水府本」による書き入れを、のちに訂正している「高野本」とは、椋齋校本跋文で弘賢から借りたという高模本ではないか、というのである。

以下、前田家蔵椋齋自筆稿本(文化元年〔一八〇四〕七月二十八日。以下、A本)および椋齋清水濱臣校合自筆書入本(同年五月三日)には数種類の奥書が存するが、ここに記した年紀の椋齋の奥書によって、椋齋の『靈異記』校定の進捗状況がかなり具体的に知られる。それによれば、弘賢の該本書き入れ資料である椋齋水府本(A本と推定される)には、弘賢が該本跋文を記した享和三年(一八〇三)当時は、いまだ高模本の書き入れがなかったことが確認される。しかるに、該本書き入れの訂正例を他の第一類、第二類それぞれの系統本で調査すると、原字は第二類、校異・訂正の書き入れは第一類のみあるものとはほぼ完全に一致することなどから、該本書き入れには、第二類の水府本だけではなく第一類の高野本によるものがあることがわかる。とすれば、その第一類の高野本とは、高模本としか考えられず、該本書き入れは、水府本および高模本により、二度にわたって(小泉氏によれば、一度めは三〜四回)なされたことになる。

以上を証したのち、小泉氏は、該本の高模本による書き入れ約一五〇例を摘出して第一類二本を検討し、上野図書館本が訓釈・傍訓に至るまでそれらと一致していることを明らかにされた。結びで氏はこう述べておられる。

以上の考察によって、上野本は高野本原本のままの姿を完全にとどめていると言つても決して過言ではないだろう。高野本原本が見出されない現在、上野本こそ原本的価値のある一本として改めて見直されなければならないと思う。(傍点小泉氏)

この結論は広く受け入れられて、先に記したように、国会図書館本(旧上野図書館本)の影印本が、小泉氏の解説を付して刊行されたが、これら小泉氏の高野本に関する一連の業績を決定的なものとしたのは、当不忍文庫本書き入れだったのである。

(四) まとめ、ならびに研究史余話

以上みてきたごとく、当不忍文庫本は、その本文は、真福寺本の模本の影鈔本として、『靈異記』本文校定史上、二度にわたる画期的事業のいずれにおいても中・下巻の底本として採用されてその原動力となり、また、その書き入れは、従来祖本の所在が不明であろうとしてもその姿の知られなかった高野本の諸伝本の中で、国会図書館本が祖本に最も近い信頼すべきテキストであることを確定せしめた、『靈異記』研究史上極めて貴重な一本である。

なお、当不忍文庫本は、掖齋校本校定の際に披見せられて以来、佐藤校本以降はその複写本が行なわれており、実物は大島雅太郎氏蔵とされたまま、本稿冒頭でふれた貴重本展示まで、『靈異記』研究者にとっては事実上所在不明であった。

① 不忍文庫の印を有し大日本國現報善惡靈異記と題する本が現在に傳つてゐて、複製本が世に出てゐる。(佐藤校本六頁。傍線筆者、以下同じ。)

② 不忍文庫本は今、大島雅太郎氏の所蔵となつてゐる。(全書本五二頁)

③ 同文庫(不忍文庫・筆者注)本は現在行方が知られず、武田先生の御厚意によつて青寫真本で調査した。(小泉論文①三五頁上段)

④ 不忍文庫本は大島雅太郎氏所蔵という。私は武田祐吉博士所蔵復本によつた。(小泉論文⑥一一八頁下段)

⑤ (全書本は・筆者注)その(不忍文庫本の・同上)所蔵者を大島雅太郎と記す。(改行・同上)当本については直接調査する機会がなく、かつて武田祐吉氏所蔵の複写本を借用し、それに拠つた次第である。(小泉論文⑧九一〇頁)

三氏が手にされた不忍文庫本は、以上の記事から、同一の複写本であつたものと思われる。全書本解説の記事の口吻からすると、あるいは、武田氏は実物を御覧になつてゐるかもしれない。また、少なくとも昭和二五年をそれほど遡らぬ時期までは、該本が大島氏のもとに蔵せられていたのは間違いない。それがホールレー文庫に入り、フランク・ホールレー氏の逝去に伴う入札売立

会を経て、本学図書館の所蔵となったのは書誌の項で述べたとおりであり、大島氏の手許を離れた時点で所在が不明となったわけである。いささか不審なのは、小泉氏が、㉔と㉕で、異なる発言をしておられることである。氏は、㉔の直前で、「武田祐吉先生著『日本靈異記』（日本古典讀本）（傍点筆者）」と記しておられるが、既に記したごとく、正しくは、武田氏校註であり、古典全書であるから、あるいは全書本を確認されなかったのかもしれないし、あるいは当該箇所を見落しただけかもしれない。しかし、書誌の項で書き入れの筆跡についてふれ、ここでも引いたように、小泉氏は、武田氏による懇切な御教示を直接得ておられたし、また、小泉論文⑧のあとがきで、全書本の出版に大きなショックを受けて研究を再開、「高野本日本靈異記考」（本項③で紹介済）が成った旨記しておられるから、小泉氏の該本に言及するはじめての論文にみえる㉔の㉔は、武田氏の御教示によるとみてさしつかえないのではあるまいか。それを、二本日以降の論文では、改めて全書本に従って大島氏所蔵とし（㉕の㉕）、それを㉖の㉖で明記したものと思われる。してみると、少なくとも武田氏は、全書本刊行後まもなく、該本が大島氏の手許を離れたことを耳にされたとおぼしい。（書誌の項、蔵書印の部分参照）

三 真福寺本との異同

該本は真福寺本の模本の影鈔本であるが、親本にあたる模本が真福寺本を書写するにあたって、意図的になされたと思われる本文の改変は以下の五例である。これらはすべて小泉論文②に指摘済みであり、本稿でもその一部にふれているが、ここにあらためてまとめる。なお、真福寺本は小泉論文⑥によった。（真真は真福寺本、忍忍は不忍文庫本）

- ㉔ 真真 中巻末にみえる「日本國現報善惡靈異記中巻」およびその後の別筆「一交了」が忍忍にはなく、「一交了」が忍忍の下巻末に、真真 中巻末と同じ字体で書かれている。
- ㉕ 真真 の 中二四 中三〇 両話は、題目を前話本文に続けて記して見せ消ち、次行にあらためて題目を記してから本文に入る。見せ消ちにされた題目は、末尾の条数表示の定型部分「——縁廿四（世）」のみを記していない。あたかも、本文

と思い込んで書き進め、題目の定型の部分に至ってそれと気がついたごとくである。このことは、〈真〉が親本を書写する際にその体裁を改めたことを意味するとされる（小泉論文⑥一一五頁上段）が、その見せ消ちの部分を〈忍〉は省略する。〈中三〇〉の場合、行数が一行減ずる。

④ 〈真〉の〈中三二〉では、十一行目に「酒債」の二字が傍記されているのを、〈忍〉は本文に入れているために、以下話末まで当該行を含めて十行にわたって文字の配列がずれている。〈真〉ではそれを九行で記してあるから行数が一行増えたことになる。小泉氏はこの点を見落しておられるようだ。本文の行数が変わるのは、⑤をあわせて以上二列のみで、結果的に中巻の総行数は変化しない。

⑦ 〈中五〉「九日」〈真〉同話九行目 〈中一九〉「前遮」(同一三行目)を、〈真〉は二重に衍書して見せ消ちに、〈忍〉はその衍字を省略する。

⑧ 〈真〉は〈中四〉「知善於狐之力也」(〈真〉同話一行目)の「善」を見せ消ちにしてその右に「蓋」と傍書するが、〈忍〉は傍書のみを本文に記す。以下六例みえる。〈中二二〉「焚」↓「驚」(同一行目)、〈中二六〉「彼」↓「往」(同四行目)、〈中三〇〉「几」↓「化」(同一行目)、〈中三二〉「矢」↓「矢」(同九行目割注右)、同「吹」↓「咲」(同九行目割注左)、〈中四二〉「及」↓「乃」(同七行目)。

これら以外にも、誤写とおぼしい例がかなり大量に存するが、筆跡まで真似た模本の影鈔本という性格ゆえであろう、運筆の加減で誤りとまでは言いかねる場合が極めて多く、そのすべてを調査するには至っていない。

たとえば〈中二二〉「夫将大炬時(全集本)」の「炬」を、〈真〉〈忍〉はそれぞれ次のように記す。

〈真〉

炬 炬

また〈中二二〉「蹲光扶感火(全集本)」の「火」は次のごとくである。

〈真〉 〈忍〉

大 大

かかる例はその最たるものであって、〈忍〉のみを参照した場合、どうしても誤ってしまうであろうから、該本本文を行なうにあたっては必ずおさえておくべき点といえる。

〈忍〉と〈真〉の異同を指摘した小泉論文②の主旨は、〈真〉と椋齋校本との距離を明らかにし、攷證によって、椋齋校本がどこまで真福寺本を復元しようかという点にあった。その過程で、椋齋校本中・下巻の底本とされたといわれる〈忍〉と、〈真〉との異同が問題にされたわけである。今述べた微妙な異同例多数も当然その視界に入っているが、その最後に〈附記〉として小泉氏は興味深い問題を提起された。

以上によって、椋齋の資料（校本及び攷證）と不忍文庫本とに少なからぬ異同が存することを知った。私は前記したように、椋齋が不忍文庫本を直接の底本にしたとする通説に従って考察したのであるが、不忍文庫本は弘賢自身の稿本なる故、椋齋には別の轉寫本でも作つて貸したために底本そのものに異同が生じたことによるとも考えられよう。しかし、その別本そのものも、また別本が存したことを知る資料も現在のところ見當らない。一方、通説に従うならば、椋齋は攷證に註記することなくかなり底本を改めたことになり、考證學者としての厳密さにいささか疑問を抱かずにはおけないことになる。これは今後の問題として残しておくことにする。

さらに、小泉論文③では、椋齋校本刊行後に椋齋自身がそれに〈忍〉の校合を試みていることが明らかにされた。これらを受けて、小泉論文④では、攷證刊本への椋齋自筆の書き入れを調査、椋齋校本が底本の原字を改定する際の攷證注記への、書き入れによる補訂が一字に過ぎないことから、

（〈忍〉と椋齋校本の…筆者注）多数の不一致例（小泉氏は百五十字以上とされる…同上）は校正（椋齋校本の…同上）のミスに帰すべきでなく、別本（不忍文庫本の転写本か）を底本としたための異同によるものと考えられる。（五六頁上段）

とされた。大系本解説もこの立場に立つ。最終的には、小泉論文⑦で、昭和四七年五月に川瀬一馬氏によって発見紹介（『日本靈異記校本並びに攷證の椽斎自筆稿本とその自筆訂正刊本』〔『かがみ』一六号。昭四七、五〕）された台北故宮博物院蔵椽斎自筆稿本中に、椽斎が座右に置き改訂を積んで椽斎校本および攷證の礎としたとみられる、高野本祖本および真福寺本の二模本を底本とする新訂本（文化二年〔一八〇五〕頃執筆・四二頁）があることから、それが、引用した小泉論文④にいう「別本」にあたるとし、以下のごとく結論された。

これ（前述の新訂本…筆者注）の本文を復元した上で、それと不忍文庫本とを対校してみると、異同は約一五〇字存するが、異同の程度を検討すると、やはり転写の間に生じたものとみるのがよいと思われる。（四七頁下段）

小泉氏の一連の『靈異記』諸本および研究史の研究は、常に原本にあたって正確・詳細を極め、その領域での他の追随を許さぬものであるが、その中で、例外的に該本だけはその複写本によつたためであろうか、椽斎校本との異同約一五〇字を論じた小泉論文②の中には、いささか気になる点もみえる。

たとえば、先述した〈中二〉の「炬」、〈中二〉の「火」は、〈忍〉はそれぞれ「焔」「大」とするとされ、ともに〈忍〉の模写の誤りであり、椽斎校本では〈真〉同様に改めたが攷證注記を欠くとされる（三七頁上段～三八頁下段）。いずれも、真福寺本ならずとも対校本が存すれば十分に判読可能であろう。他にも、少なからず、二度にわたる模写・影鈔による〈忍〉の性格に起因する椽斎の注記脱とみられるものがあげられている。また、〈下一〉で「生」の訓釈を、

〈真〉 あさらかせ
尔し天

〈忍〉 あさらあ
せよし天

（あさらかせ
尔し天）

とするとされる（三四頁上段）が、〈忍〉は〈真〉に同じく（正確には右記下段の括弧内のごとく記す）、これは小泉氏の誤り。無論、一方で、明らかな注記脱とみられる例も少なからず存し、その点、小泉氏の結論そのものは首肯されるが、「約一五〇字」という数字には、にわかには従えない。氏自身が椽斎について、「彼の考証における校勘の峻厳な方法とその的確な眼力に關しても、また、私心を介入させないでいわゆる真実に対して謙虚に遇しうる、学徒としてのあるべき人柄についても、既に本

稿の随所でふれた。彼の業績は、そういう人柄のにじみ出たものであることを思うにつけ、その信憑度はいよいよ高いものと評価できるのであろう。(小泉論文⑦四七頁上段)と述べ、また「これを仰げばいよいよ高しの感措く能わざるものがある。」と結んでおられるが、その椽斎自身が披見し書写した本文に、かかる大量の迂闊があったとは思われない。

いずれにせよ、筆者存疑の点は、当不忍文庫本に存する微妙な「誤写」とほぼ完全に重なる。当該例の精査・報告を期したい。

なお、攷證に関して本稿が依った「狩谷椽齋全集第二」の解題に、「椽齋が『靈異記』に關する業績の三部作と云ふべきものは、第一に収めた『校本日本靈異記』と、此書と、第三に収める『日本靈異記校譌』とが相待って完備するのである。(二頁…傍点筆者)」という。いささか気になる記事であるが、続刊の「狩谷椽齋全集第三」(大一一五、六)に、その書名はみえず、「扶桑略記校譌」が収められている。椽齋の『靈異記』校訂と全く無縁の書物ではないゆえの「全集第二」の解題の誤りであろう。

三 説話引用書目の書き入れにみえる『今昔物語集』卷十八

当不忍文庫本中巻には、各話冒頭の題目の左上付近の余白に、各話を引く諸書の書目が墨筆で書き込まれている。そこにみえるのは、「仮字本」(いわゆる片仮名本『日本靈異記』。正徳四年(二七一四)の刊記を有する)、『今昔物語集』、『法華験記』、『古今著聞集』である(その他の書き入れには、これら以外に、『袖中抄』、『三宝絵詞』、『泉州志所引本(『靈異記』)』、『宝物集』、『神名式』、『和名鈔』、『新撰字鏡』、『後漢書』、『南蛮伝』などとみえる)が、仮字本を除き、圧倒的多数を占めるのが『今昔物語集』である(四十二話中三十一話)。そのほとんどが巻・条数を明記するが、うち二例のみ条数を記さぬものが存する。小論の最後に、この点について言及しておく。

〈中四〉〈中二七〉がそれであるが、現存する『今昔物語集』諸本のほとんどすべてがこれを卷二十三に収めている(順に、十七、十八話)。しかるに、当本書き入れには、以下のごとく記す。

〈中四〉

今昔十八或云廿三 部名条数俚説

〈中二七〉

今昔十八 或云廿三

『今昔物語集』大系本（岩波書店）昭三四、三、昭三八、三、卷十八に付された解説によれば、現存する諸本が共通して卷十八を欠いている中で、大系本のいう〈内閣文庫本B〉（岡本保孝手校本）が卷二十三をこれにあて、彰考館の一本が卷二十二をこれにあてるといふ。当不忍文庫本の書き入れは、奇しくもこの岡本保孝手校本の内容と一致している（後述の内田論文によれば、内閣文庫本A・Bのみが、卷十八に卷二十三をあてるといふ。三二頁上段）。その岡本保孝に『今昔物語出典攷』（國學院大學刊『国文注釈全書』第十三卷、明四〇。すみや書房から昭四四、一、再版発行。以下、『出典攷』という著作があつて、その卷十八の項には次の記載が存する。

今昔物語集卷第十八孝藏本十八トス △廿三卷トナスヘキカ孝云△ハ廿三トスルイカナナル據アルニカ十八卷廿一卷ナド、ナシテモ害ハアルマシキニ其意タトリカ子タリ

ここに△とあるについては卷頭の序文にその注記があり、また、本書執筆の事情にもふれているからそれを引いておく。なお、句読は筆者が私に切つた。

此今昔物語條條の出典は、三拾年前狩谷掖齋存生の比これかれ書付おかれたるをかりてそのまゝにうつしおきたるに、又、友人伴氏直方といふもの、挿架の書におなし筋の物あれば、借得てくらべみるに、藍本はひとつものにて掖齋氏増補ありたるものとみえて、本朝の部は殊に出處おほくもれたり。全部にわたりては、伴氏のかたにのみ出處しるしおけるもあれば、これをも書加へおきたるを、このころ、友人木村正辭氏、又、標目 考と題したるをかされたり。ひらきみるに、是も兩氏の書とはしめはひとつものとみえて、つましるのまたくおなしさまなるもおほし。天竺の部には殊におほく出處をのせられたるは、今そのまゝに書入おく。△の印を冠して兩氏と混せしめじと也。（後略）

掖齋―保孝―正辭という学統については、書誌の項蔵書印「木正辞章」の部分ですでにふれた。当不忍文庫本に深くかかわつ

たこの学統が、ここで再現された体である。保孝にとって、今日存する諸本の卷二十三（以下、その内容を〈卷二十三〉と記す）は、卷十八だったのであり、また、それは椋斎にとつても同じであったことが、椋斎の水府本書き入れをほぼそのまま弘賢が引いた、該本の書き入れによって知られる。木村正辞が（正確には『標目考』が）、なにほどこか、〈卷二十三〉を卷二十三とする根拠（内田氏はそれを、『標目考』の依拠した今昔本文が正しい位置においていたためらしいとする。三三三頁下段）を得るまで、椋斎・保孝という碩学にとつてさえ、今日的な意味での「正しい」『今昔物語集』本文のありようを知る機会はなかったわけである。

この『出典攷』は従来ほとんど扱われることのなかったテキストで、近時、内田洋氏によってその研究が緒についたところである（『研究資料としての『今昔物語出典攷』、『國學院雑誌』九三・五。平四、五）、『研究資料としての『今昔物語標目探考』』（口頭発表。中世文学学会平成四年度春季大会、平成四、五、三一、於中央大学）。該本書き入れの「今昔十八」が欠卷であることと指摘したのも内田氏であり、同氏の指摘・助言なしには本項もならなかったことを明記しておく。内田氏は『出典攷』について、前掲論文で以下のごとく記している。

名は『出典攷』と言いながら、むしろ丹鶴叢書本の編纂を軸とする江戸末期の今昔研究の状況や、明確になったとは言いがたいそれ以前の『今昔物語集』の伝承状況を探る上での一資料として扱われるべきもの（二五頁上段）

椋斎の依った今昔本文に依拠しつつ、条数のみならず校異等を注する当不忍文庫本書き入れも、『今昔物語集』の伝承状況を探る上での一資料」たりえよう。

なお、内田論文によれば、『出典攷』は、ここで引いた『国文注釈全書』におさめられる他、国会図書館蔵「況齋叢書」本、静嘉堂文庫蔵「岡本況齋雜著」本の二本があつて、『出典攷』を収める『国文注釈全書』第十三卷の緒言では、帝国図書館蔵「況齋叢書」本によつたとするものの、現国会図書館本と比較するとかかなりの増補があるという（二六頁下段）。本項の引用箇所でも、他の二本は、見出し語の「今昔物語集卷第十八」の「十八」を空白にする由、これも内田氏に教示を得、国会図書館本についてはこれを確認した。保孝は正辞の説をいぶかしく思いながら、自説にも確信をもっていたわけではなさそうである。ま

た、椽齋は仄聞の形で「或云廿三」と記しているが、さすが、というべきなのだろうか。それとも、『出典攷』序文にいう「はしめはひとつもの」であった正辞『標目考』とかかわるところがあるのだろうか。いまだ詳かにしない。

その他、該本では、〈中三〉本文の人名「吉志大麻呂」の「大」を、朱で上からなぞって「火」とし、さらに左傍に朱で「火」、その下に朱で、続けて、

水本作父 仮字本作火 今昔宝物同

と記す。異本多数を有する『宝物集』のうち、「古典文庫」の『宝物集へ九冊本』（吉田幸一氏、小泉弘氏校。昭四四、一）巻七に、同様の本文を確認した（同書三四六頁）が、他の伝本についてはいまだ知らない。あるいは、椽齋の依った『宝物集』の手がかりとなろうか。

以上、該本が引く書目の書き入れの問題点については、今後の調査・報告を期したい。

むすび

以上見てきたごとく、当不忍文庫本は、『靈異記』研究史上いくつもの大きな業績に深くかかわった、極めて重要な位置を占める伝本である。しかも、二度にわたる転写を経ているながら、祖本である真福寺本をかなりの程度正確に模しているから、その異同を念頭におけば、真福寺本の披見がいまだ困難である今日、その本文も十分に価値を有しているといえる。また、その書き入れは、『靈異記』研究史を離れても、いまだ研究途上である江戸後期の説話研究の状況を知る上で、ささやかではあるがその資料の一たりうるものである。

四十年来眠り続けてきた、かかる価値ある一本を今日世に紹介できることは、筆者にとっては望外の喜びである。と同時に、浅学ゆえの誤読・誤謬によって、該本および先学の業績を害なうことあるを深く恐れる。大方の御叱正を乞う。

注

(1) 本項は、次項でふれる①②および左記二篇の論稿に多く依拠するが、煩雑になるを避け、原則として特にそれを注さなかった。

徳江元正氏「平成三年度國學院大學國文學會秋季大会 國學院図書館貴重本展示 解説」(平三、一一、一五)

磯貝幸彦氏『國學院大學図書館貴重書解題目録(二)』解題(口) 22「日本靈異記」(國學院大學図書館)平五、三)

(2) (3) (4) (5) 諸氏については、『国学者伝記集成(全三卷)』(昭五三、八、名著刊行会より復刊)、『漢学者伝記集成』(竹林貫一〈関書院〉昭三、五)、『近世漢学者伝記著作大事典』(關儀一郎氏・關義直氏共編、昭一八、六)、『日本古典文学大辞典(全六卷)』(岩波書店)昭五八、一〇〇、一一、森銑三著作集 第七卷』(中央公論社)昭四六、六)、『それぞれの当該項によった。

(6) 所據の原本に摸して書寫したものを『模寫本』(模本)と總稱し、原本を透き寫しに模寫した場合には『影寫本』(影鈔本)、又、臨模した場合には『臨寫本』^{りんしゃほん}といふ。(川瀬一馬氏『日本書誌學之研究』(大日本雄弁會講談社)昭一六、六。一九〇七頁)

(7) 〈中一〉——次項④小泉論文⑧七頁。〈下三八〉——『図説日本の古典3 日本靈異記』九三頁(集英社)本稿では、平元、九発行の新装版によった。〈下末〉——次項⑦小学館全集本口絵一二頁。

(8) 次項⑥小泉論文②三七頁上段。

(9) 次項⑤小泉論文①三三頁上段および三五頁上段「注二」。

(10) (11) (2) (5) に同じ。

(12) (13) (14) (15) (16) 大島・ホーレー両氏については以下の諸書によった。

①反町茂雄氏『菟書家・業界・業界人』(八木書店)昭五九、六)

②同氏編『紙魚の昔がたり 昭和篇』(八木書店)昭六二、一一)

- ③同氏『一古書肆の思ひ出3 古典籍の奔流横溢』(平凡社)昭六三、三)
- ④同氏『一古書肆の思ひ出4 激流に棹さして』(平凡社)平元、八)
- ⑤川瀬一馬氏「大島氏青谿書屋のこと」(『書誌學』復刊新二十九號、昭五七、四)
- ⑥『来日西洋人名事典』(紀伊國屋書店)昭五八、三)
- 特に参照したのは、大島氏については、②の一四五～一五〇頁「石井積翠軒と大島青谿書屋」「態度の対照的な大島、石井の両コレクター」、③の二九一～二九六頁「大島青谿書屋本の分散」、および⑤、ホーレー氏については、①の四〇～五三頁「大コレクター、フランク・ホーレー」、⑥の四二頁「ホーレー」の項である。その他にも参照した部分はあるが、目録以外は特に注さなかった。目録は、(13)が⑤の三五頁、(14)が③の二九二～二九四頁、(16)が①の二〇三頁に掲載されている。
- (17) 「日本靈異記の佚文」(『宗教文化』一、昭二四、一二)
- (18) 小泉論文⑧によった。
- (19) その一部には弘賢の資料もあったらしい旨、小泉論文①五九頁下段に述べられている。

附記

本稿は、本学國文學會平成五年度秋季大会(平五、一一、二八)における口頭発表に、加筆補正したものである。席上、貴重な御教示を頂戴した、古相正美、内田洋、多田元、徳江元正の諸氏に深謝申し上げる。また、該本の披見・調査にあたっては、本学図書館、特に、調査課長の磯貝幸彦氏に深甚なる御配慮を賜った。ここに記して深謝申し上げる次第である。

(國學院大學大学院特別研究生 藪 敏晴)